

19世紀後半から20世紀初頭のイラン経済

—— 伝統的産業から見たイラン経済 ——

か　　のう　　ひろ　　まさ
加　　納　　弘　　勝

I 流通から見たイラン経済

1. イラン経済の構造と変化
 - 貿易統計による —
2. イラン経済の新しい圧迫者ロシア
3. 国内流通ルートの変化

II 生産から見たイラン経済

1. 原料作物の生産と消費
2. 主要都市の生産事情
3. イラン伝統的産業の発展段階
 - むすびに代えて ——

I 流通から見たイラン経済

イランの伝統的産業(注1)は、絹織物、羊毛織物、カーペット、金糸、銀糸、ビロード、綿糸、綿布、皮革製品、染料、さらさ、シヨールなどを製造した。織物関連業はイランやイスラム世界の伝統的産業のなかでも、とくに重要なものであった。ポーズワースも、11～12世紀におけるイラン北東部の町、ニシャープールの経済的繁栄が鉄容器、針、ナイフなどの生産に基づくとともに、織物業にとくに依存していたと述べている(注2)。イスラム都市のうち、何らかの形で織物を織らない町はなかったのである。というも、イスラム世界では、織物はある宗派に属することの証しであり、ある職業や役職に就いていることの証しでもあったからである。さらに、この世界では家具と言えばカーペットや掛物のことであって、これらの織物は交換性豊かな富であったからでもある。19世紀～20世紀初頭のイスラム世界でも、このことはほぼ妥当したようである。したがって、本稿では、伝統的産業の中心に織物業を配置して記述を進めてゆきたい。

さてイランの19世紀前半は、イギリスやロシアが対イラン戦争を起こし、カージャール朝(注3)イランに門戸開放を強要する時期である。ロシアとの戦争の結末は、グリスタン条約(1813)やトルコマンチャーイ条約(1828)によって、ロシア商人にイラン国内での免税や治外法権

を与えることになった。また、イギリスとの戦争の結末が、イギリス・ペルシャ条約(1841)でつき、イギリス商人にも同様な特権が与えられた。この状況は、イランの商人や手工業者にとって好ましくはなかった。

イランの19世紀後半から20世紀初頭は、西欧列強が解体期のカージャール朝を媒介にしてイランを半植民地化してゆく時期にあたる。この時期にイランの商人と手工業者の活動が停滞させられ、商人と手工業者の結びつきが弱められてゆくことになった。というのは、特権を得た大商人がヨーロッパ商品、とくに、イギリス商品の販売のみならずわりはじめるからである。

以上のようにカージャール朝は中期以降、イランの中小商人や手工業者に好ましい環境を作り出すことができなかった。しかし、初期には二つの点で中小商人や手工業者の活動を助けたことも事実である。つまり、初代、アーガー・ムハンマドは豊かな商人への過重な税を禁止し、ゼンド(1750～1794)前王朝に一般的だった恣意的徴税を廃止した。このことが第1の点としてあげられる。彼の後継者、ファトフ・アリーも国内産業保護のために、輸入を抑えて諸国内産業を保護したのである。また、第2の点として、強力な王朝の確立がイラン国内の安定と国境の拡大をもたらしたことがあげられる。つまり、外国貿易の主要な基地でしかも軍事要塞として、エレバン(現アルメニア共和国の首府)、ラシュト、カズビン、ホイ(タブリーズの北西)を再建し、イランの経済領域を広めたのである。だから、1800～1850年には「どちらかと言えば、商人はおごった階級(pampered)になった」(注4)のである。

この好ましい2条件により、初期カージャール朝下で伝統的産業は繁栄した。繁栄の一側面を、インドとの貿易を除けば、ロシア、トルコ、バグダッド、アラビア、ウズベクとの貿易はペルシャに有利であったとフレーザーは伝えている。この頃には輸出の見返りとして大量の

外国正貨がイランに流入した。もちろん、これら正貨全部がイランに蓄蔵されたわけではなくて、東方地域にも流出していた。しかし、「この国の通貨を形成し困庫を潤し、豊かな人々の間に蓄蔵を許すのに十分な量は滞留した」(註5)のである。

こうした繁栄も長くはなく、1840年以降には前述の不平等通商条約により、西欧商品がイランに流入して大きな打撃をイラン商人や手工業者に与えはじめた。たとえば、タブリーズにおけるイラン商人の活動は、ロシア人や外国人商人の活動に比較して、1837年以降急減した。また、1844年のイギリス領事、アボット(K. E. Abbott,)(註6)の報告は、カーシヤンの商人や手工業者たちが西欧商品の流入で被害を受けているので、自国産業の保護を嘆願した(註7)と伝えている。しかし、ファトフがなした産業保護を、当時のシャー・ムハマドは与えられなかった。こうして、1850年代以降になると徐々にイランの伝統的産業は苦境に立たされてゆくのである。

1. イラン経済の構造と変化

—— 貿易統計による ——

イランの貿易収支は、1850年代にしか均衡をえていない。89年と1911~13年には輸出額が輸入額の55%に限られ、完全な入超になっていた。ヤガネギの数値を除いて

第1表 イランの貿易額(1850~1911)

(単位: 1,000ポンド)

	輸入額	輸出額	輸出額— 輸入額
1850年代 ¹⁾	2,990	3,000	10
1889 ²⁾	3,910	2,130	-1,780
1885~1900 ³⁾	3,790	2,710	-1,080
1911~1913 ⁴⁾	3,940~	2,320	-1,620~
	4,960	2,700	-2,260
1911~1913 ⁵⁾	10,700	7,890	-2,810

(出所) 1) Blau, O. E., "Commerzielle Zustände Persiens," Berlin, 1853. in *The Economic History of Iran 1830-1914*, ed. C. Issawi, Chicago, the University of Chicago Press, 1971, pp. 132-145.

2) Curzon, N., *Persia and Persian Questions*, London, 1892. reprinted London, Frank Cass, 1966, vol. 2, pp. 559-561.

4) MacLean, H. W., "Report on the Conditions and Prospects of British Trade in Persia," in ed. C. Issawi, *op. cit.*, pp. 136-137.

3), 5) Yaganegi, E. B., *Recent Financial and Monetary History of Iran*, New York, 1934, p. 89. なお、4) 以外は各種通貨単位をポンドに換算し、1,000の位で四捨五入した。

第2表 1850年頃のイラン貿易(単位: 1,000ポンド)

輸入品目	輸入額	輸出品目	輸出額	輸出額— 輸入額
綿織物	1,230	綿織物	340	-890
絹織物	410	絹織物	330	-80
絹織物	250	絹織物	150	-100
金銀製品	299	皮革製品	60	-239
陶器・ガラス	20	皮革製品	30	
		その他	40	
小計	(2,200)		(950)	(-1,250)
砂糖	70	生糸	940	
茶葉	260	茶葉	100	-160
薬品・染料	190	薬品・染料	60	-130
雑貨	200	乾果	120	
		皮革	50	
		バター	20	
		脂肪	20	
小計	(720)	雑貨	20	(+590)
金属原料	20	羊毛	260	
金属材料	30	小麦	220	
		大麦	110	
		タバコ	30	
		綿花	30	
		雑貨	30	
小計	(50)		(750)	(+700)
総計	2,970		3,010	+40

(出所) Blau, O. E., in ed. C. Issawi, *op. cit.*, pp. 132-135. ターレルを Blau の示す換算率を用いてポンドに換算し、1,000の位で四捨五入した。輸出額—輸入額の項は作成。

考えれば(註8)、輸出額は1850年代が最高である。つまり、60年間、輸出額は増大していないのである。

1850年代の貿易構造を見ると、輸入では織物輸入が63.3%、なかでも綿織物の123万ポンド、41.1%が大きい。熱帯産品の輸入は24.0%で、茶が26万ポンド、8.6%となっていた。また、輸出では製品輸出が31.6%、半製品が43.5%、原料が24.9%であった。織物輸出が82万ポンドにおよび、かなりの製品輸出がなされていたように思われる。

ところで、輸出入に同じ品目があるので、この大半が中継貿易と考えて純輸入(出)(=輸入—輸出)額で部門別に見直すと、製品部門では第2表のように125万ポンドの入超となり、なかでも、綿織物89万、金属製品23万ポンドの入超が大きい。製品部門での純輸出は、皮製品3万ポンドに限られていた。次に、半製品(熱帯産品)部門では、砂糖7万、茶16万、薬品・染料13万が多量の純輸入である。しかし、生糸94万ポンドが輸出され、結局59万ポンドの出超であった。また、原料部門は大半が輸出で、羊・馬、穀物、タバコがおもな輸出品であった。70万ポンドの出超である。だから、製品部門での125万

第3表 イランの年次別輸入額 (単位: 1,000ポンド)

製 品	① 1850年の 粗輸入額	①' 1850年の 純輸入額	② 1889年の 粗輸入額	②' 1889年の 純輸入額	②'-①'	③	③'	③'-②'
						1910~13 の粗輸入 額	1910~13 の純輸入 額	
綿毛絹織物	1,230	890	2,290	2,290	1,400	2,050		
織物	410	80	570	540	360	400	2,280	-550
絹織物	250	100						
金属製器具	290	230	30	30	-200	160	160	130
陶器	20	20	110	110	90	90	90	-20
砂糖	70	70	310	310	240	1,150	1,150	840
(コーヒー)染料	260	160	70	70	-90	230	230	160
茶葉	190	130	50	-90	-220	40	40	130
香料	200	200	290	260	260	50	50	-210
その他					-200			
金銀	50	50	50	50	0	0	0	-50
燈油			50	50	50	140	140	140
皮革						50	50	0
羊毛			100	100	100	40	40	0
その他						40	40	40
計	2,970	1,930	3,920	3,720	1,790	4,470	4,230	510

(出所) 第1表と同じ。また、①'、②'、③' はそれぞれの年の純輸入額を示す。つまり、輸入と輸出に同一商品があるときは、輸入-輸出の額である。そして、①'~②' や ②'~③' では同期間の純輸入額の増減を示す。なお、①と②はポンド換算し1000の位で四捨五入した。各項目の四捨五入のため、統計が第1表と異なっている。

第4表 イランの年次別輸出額 (単位: 1,000ポンド)

製 品	① 1850年の 粗輸出額	①' 1850年の 純輸出額	② 1889年の 粗輸出額	②' 1889年の 純輸出額	②'-①'	③	③'	③'-②'
						1910~13 年の粗輸 出額	1910~13 年の純輸 出額	
綿毛絹織物	340	0		0	0			
織物	330	0	30	0	0	170	0	0
絹織物	150	0		0	0			
カベツシヨール	100	100	100	250	250	150
金皮	60	0		0	-30	50	50	50
金属製器具	30	30		0	-30			
その他	40	40	20	20	-20	0	0	-20
生茶葉	940	940	390	390	-550	230	230	-160
乾燥品	100	0	...	0	0			
乾果	60	0	140	0	0			
香料	120	120	230	230	110	480	480	250
油脂	50	50	20	20	-30	110	70	50
貨物	20	20		0	-20			
羊毛		0	30	0	0			
毛織物	20	20		0	-20			
馬毛			540	540	540	300	300	-240
馬毛			20	20	20	70	40	20
小麦	260	260	20	20	-240	90	90	90
大麦	320	320	340	340	20	270(米)	270	-70
小麦	110	110	100	100	-10			-100
雑穀	30	30	140	140	110	430	430	290
その他	30	30	-30			
計	3,010	1,970	2,120	1,920	-50	2,540	2,300	380

(出所) 第1表と同じ。見方は第3表と同じ。ただし、①'②'③' で0となっている項は、すでに同項の輸出額を第3表で粗輸入額-輸出額=純輸入額を示す際に算入しているので、粗輸出額はあっても純輸出額は0となる。なお、①、②はポンドに換算し、1,000の位で四捨五入。

の赤字を半製品と原料部門59万と70万各ポンドが補い、国際収支は黒字になっていたのである。

以上のような1850年における輸出入の型を変えてゆく要因が、1889年には現われた。輸入では織物の増加が著しい。なかでも綿織物の純輸入増140万は最大で、羊毛・絹織物でも36万ポンドも純増した。これ以外の砂糖24万ポンドの増加は、茶、薬品・染料の減少で補われた。結局、50年からの純輸入増(179万ポンド)は、織物の輸入増(176万ポンド)の増加によっていたと言える。

1910~13年になると輸入の型は再び変わってくる。輸入額が51万ポンドしか増えなかった89年からの20年間でめだつことは、砂糖84万、茶16万ポンドの増加である。ただし、茶は50年に比較すれば7万ポンド増えたに限られた一方で、砂糖は108万ポンドと激増した。逆に、織物輸入は2分の1を占めたとはいえ、89年よりも55万ポンド減ったのである。

輸出においても変動要因が現われた。1850年には生糸が輸出の2分の1を占め、穀物、羊・馬、乾燥果実、タバコが残り44%を占めていた。ところが、89年には生糸で55万、羊・馬で24万ポンドの輸出が減った。これに対して、ケシで54万、綿花で11万ポンドが増えた。イランの輸出用作物の交代が生じたのである。これとは別に乾燥果実は著実に増加した。また、製品部門ではイランの伝統的織物業(カーペット、ショール)への特化による輸出が10万ポンド生じた。これに対して、50年頃見られたイギリス綿布の加工輸出はとどえたのである。

1910年になると、89年における輸出の主役は再び代わった。ケシで24万、生糸16万、タバコ10万、米7万各ポンドが89年より減った。これとは逆に、綿花29万と乾燥果実25万が増えてきた。製品部門では、カーペット・ショールの15万、皮・皮製品の10万ポンドと、イラン得意の分野で輸出が増えたのである。

まとめてみると、1850~1910年の約60年間に輸出は300万ポンドを超えることはなかった。最大の輸出商品是一方で、生糸→ケシ→綿花と外国市場の状況に応じて変化した。他方で乾燥果実、皮・皮製品、カーペット・ショールの輸出は順調に増加し、イラン的な輸出商品となった。イランの輸出を支えた商品には、このような2系列があったのである。輸入は60年間に1.3~1.5倍になった。綿織物が最大の輸入品であるが、20世紀に入ると砂糖輸入が急に増えた。いわば、イランの経済は外から流入する二つの商品、イギリス商品の代表、綿織物とロシア商品の代表、砂糖によって土台をゆすぶられたのである。

2. イラン経済の新しい圧迫者ロシア

イランにとって好ましい貿易収支を示した頃(1850年)の国別貿易の型は、入超地域がイギリス、インドに限られ、ロシア、トルコ、内陸アジアは出超地域になっていた(第5表)。1.とこの事実から推論すれば、イランに好ましい貿易収支が維持されるためには、次の三つが重要であると思われる。(i)イギリスからの綿糸、綿織物の輸入を抑えること。(ii)インドからの熱帯産品、茶と砂糖の輸入を抑えること。(iii)ロシアや内陸アジアへの輸出を拡大することの3点である。

では、この3点でどのような可能性がイランにあったのだろうか。(i)イギリス綿織物の輸入抑制の可能性はあまり大きくなかった。なぜなら、89年にはイギリス、インドからの輸入のうち綿織物172万(絹・毛織物も52万ポンド)(注9)と製品輸入の比率が高かったし、また、1910年に少タイギリス織物の輸入が減ったけれど、同地域へのイランからの輸出は70万ポンドでイランへの輸入の3分の1しかなく、イギリスに圧倒的に有利な交易関係は揺らいでいないからである。

(ii)インドからの茶と砂糖の輸入抑制は、第3表で見たように、ますます困難になってきた。なかでも、急増する砂糖の輸入制限がまず問題である。確かに1850年代に砂糖はインドから輸入されたが、20世紀初頭にはロシアから輸入された(注10)。だから、熱帯産品の輸入抑制を、イラン経済に影響を与える独立要因としてではなく、ロシア貿易との関係で検討する必要が生じたのである。

(iii)ロシアと内陸アジアへの輸出拡大のうち、後者への輸出拡大は期待できなかった。なぜなら、1850年よりも

第5表 イランの貿易相手国 (単位: 1,000ポンド)

	1850年 の輸入 額	1850年 の輸出 額	輸出 額— 輸入 額	1889年 の輸入 額	1910年 代の輸 入額	1910年 代の輸 出額	輸出 額— 輸入 額
ロシア	240	1,000	+760	350	2,000	1,500	-500
イギリス	1,460*	530*	-930	2,260	2,000	500	-1,500
インド	710	400	-310			200	200
ヨーロッパ	*	*			710	410	-300
トルコ	140	360	220	420			
内陸 アジア	430	710	280		200	80	-120
計	2,980	3,000	-20	3,030	4,910	2,690	-2,220

(出所) 第1表に同じ。

(注) * ヨーロッパの貿易額はイギリスの項に含まれている。

輸入額で2分の1に、輸出額で9分の1に激減した(第5表)。つまり、1910年にもなっても確かにこの地域は、イランが綿や毛織物を輸出して原料を輸入できる唯一の市場であったが、取引額が減り、しかも、入超地域に転じた。この地域への輸出拡大はあまり期待できないとすれば、ロシアとの貿易がイランにとって大きな影響を与えろと言えよう。というのも、1910年には輸入額が1850年の約6.3倍、輸出額が約1.5倍となり、イギリスとの貿易額の1.4倍と拡大したからである。だから、ロシアとの貿易関係の結果がイラン経済を大きく方向づけると言える。

さてロシア・イラン貿易では、イランが1890年頃まで出超を保った。しかしながら、1870~80年に始まったロシア産業革命によって、イラン出超の基盤が崩れつつあった。そして、1890~1900年には両国の貿易額はほぼ均衡し、その後は逆に、ロシアが恒常的に出超を維持してゆく(註11)。

ロシア・イラン貿易を、繊維と非繊維に分けて考えてみよう。

イランのロシアへの輸出に占める非繊維の割合は、1844年19.6%、70年46.9%、1909年51.4%と増加した。このうち、大きな割合を果実が占め、穀物、ケシ、魚、生皮、家畜がこれに次いだ。逆に、ロシアからのイランへの輸出に占める非繊維の割合は、74.7%、57.2%、54.7%と減少した。ロシア側で繊維輸出が増えたのであ

第6表 イランのロシアからの輸入

(単位: 1,000ルーブル)

	1844	1870	1909/10	1912/13	
繊維	207.0	714.0	28,709	41,246	
非繊維	612.8	955.0	34,705	50,117	
内訳	砂糖	*	11.1	19,307	24,957
	小麦	*	7.0	4,970	7,340
	コーン	32.4	58.9	617	4,046
	鉄石	218.3	333.6	*	3,185
	石油			2,007	1,730
	小皮			1,572	1,905
	銅			769	1,182
	米	15.4	22.0	668	926
	陶器	63.9	126.0	370	190
	木材			1,408	1,423
	その他			613	570
		17.7	91.9	755	413
		4.6	*	187	484
				710	620
				290	259
	260.5	304.5	462	887	

(出所) Entner, M., *Russo-Persian Commercial Relations*; 1828-1914, Florida, 1965, pp. 10-11, pp. 65-66. より作成。ただし*は不明。

第7表 イランのロシアへの輸出 (単位: 1,000ルーブル)

	1844	1870	1909/10	1912/13	
繊維	2,332.4	2,358.7	27,792	33,532	
非繊維	569.3	2,076.7	29,447	40,959	
内訳	砂糖	17.9	*		
	小麦	169.5	1,030.3	9,573	8,534
	コーン	22.5	*	1,040	1,245
	鉄石	96.4	272.2	2,146	3,082
	石油	26.2	30.0	1,291	1,509
	小皮	*	121.0	*	255
	銅	*	127.6	3,828	1,484
	米	*	144.6	4,902	9,113
	陶器			3,167	6,285
	木材			2,202	2,502
	その他			351	660
				461	655
				486	437
		236.8	351.0	*	4,937
				*	261

(出所) 第6表に同じ。ただし*は不明。

る。つまり、1844年と70年には、鉄・鉄製品、銅が重要な輸出商品であった。ところが、1909年と12年には、砂糖輸出が総輸出の30.4%、27.3%となり、綿織物輸出(後述)に次いで2位になった。ほかに茶の輸出も大きくなった。1910年のイランの輸入のうち急増した砂糖と茶は、このようにロシアからの輸入に大きく依存していたと考えられる。

次に繊維関係のロシア・イラン貿易を見てみよう。

1844年には、綿織物146万、絹織物51万、毛織物9万各ルーブルをイランが輸出した。さらに、綿糸、生糸という半製品で19万、原料である綿花で2万ルーブルを輸出した。これに対して、ロシアは麻織物1万ルーブルを輸出したに限られた。前述した1850年における82万ポンドの織物輸出額のうち、かなりの部分が中継貿易にしてもロシアに送られていたことになる。

1870年になるとイラン側では綿花以外の繊維輸出は44年よりすべて減り、ロシアの綿織物輸出は44年の21倍に急増した。とはいえ麻織物と毛織物を除くと、輸出額ではイランの方が大きかった。しかし、ロシア織物業が発展の様子がここから読みとれる。

1909/10年になると、両国の交易関係は全く逆転した。イランが純粋に輸出できた織物は、カーペット871万、絹織物303万ルーブルに限られた。製品輸出が減り、半製品、原料輸出が増えたのである。つまり1844年に原料部分は繊維関係輸出のうち0.8%でしかなかったのに対して、1909年には51.2%となった。なかでも、綿花の輸出1260

第 8 表 イラン・ロシアの貿易額 (繊維関係) (単位: 1,000ルーブル)

	1844 年			1870 年			1909/10			1912/13		
	① イラン より	② ロシア より	③イラン の出超 ①-②	① イラン より	② ロシア より	③イラン の出超 ①-②	① イラン より	② ロシア より	③イラン の出超 ①-②	① イラン より	② ロシア より	③イラン の出超 ①-②
綿糸	19.2	0	19.2	844.2	0	844.2	12,603	0	12,603	16,892	0	16,892
綿織物	62.0	0	62.0	51.3	0	51.3	438	1,877	-1,877	386	2,322	-34,995
毛織物	1,456.3	10.7	1,445.6	1,037.1	225.0	812.1	1,622	22,350	-21,912	2,034	33,059	1,448
絹糸	*	0	*	4.0	0	4.0	437	195	1,427	285	586	-2,408
絹織物	103.9	13.9	90.0	69.6	365.9	-296.3	2,595	2,595	-2,158	2,693	2,693	2,122
麻織物	180.9	135.5	45.4	88.3	31.0	57.3	3,030	0	3,030	2,122	0	70
その他	510.1	35.2	474.9	264.2	41.8	222.4	948	652	296	942	872	-1,714
カーペット		11.7	-11.7		50.3	-50.3		1,040	-1,040		1,714	10,871
合計	2,332.4	207.0	2,125.4	2,358.7	714.0	1,644.7	8,714	27,792	-917	33,532	41,246	-7,714
							(19,078)	28,709	(-9,631)	(22,661)		(-18,585)
各総額に占める割合	80.4	25.3	76.8	53.1	42.8	59.5	48.6	45.3	(-14.9)	45.0	45.1	-45.7
							(33.3)		(-156.0)	(30.4)		(-110.2)

(出所) 第 6 表に同じ。ただし③は算出して作成。* は不明。なお、③項の(-)はイランにとって入超を示し、また、③の比率の(-)はイランの入超に対する貢献度を示す。下段カッコ内はカーペット織り物を除いたときの割合を示す。また、9/10、12/13の貿易額は③に限り、同書 p. 9 より引用。

万ルーブルは大きかった。逆に、ロシアは綿織物 2190 万、麻織物 104 万、毛織物 216 万を輸出した。綿糸と綿織物の輸出は、70 年から 40 年間で 2465 万ルーブル増えた。さらに、19 世紀の間は圧倒的であったイギリス綿布の流入も、1913 年頃にはロシア綿布の流入によって抑えられ、ほぼ半々になった。ロシアからの輸入は 9200 トン、イギリスからの輸入は 1 万 1000 トンとなった(注12)。ロシアがイギリスに追いついてきたのである。こうして、イランは先進国ロシアの製品輸入国で、原料供給国に転化させられた。その後この傾向は一層めだってくる。かつて、イランがロシアに対して持った貿易の量と質での有利性は、今や両方とも喪失してしまった。

ロシア・イラン貿易で大きな比率を占めた綿花輸出を今一度見ておこう。イランの綿花は 17 世紀末で輸出されたが、1850 年にはとどがえた。その後、南北戦争による綿花不足が価格を上昇させると、イランでも綿花生産が拡大した。イギリスはアメリカ綿の代わりに、イラン綿をインドに送った。64 年には 679 万ルーピーと 2 年前の 4 倍に急増した。しかし 66 年にはインド向けはなくなり、1046 万ポンドの綿花のうち 4 分の 3 がロシアに、4 分の 1 がマルセイユ経由で西欧(イギリスか)に輸出された。

19 世紀末以降の綿花輸出は、第 9 表のように、ロシアに限られ、1910 年には 95.94%、13 年には 95.04% の綿花がロシアに輸出された。ロシア商人の綿花欲求が、1900 年か

ら 5 年間でイランにおける綿花作付面積を 2 倍(注13)にしたほどであった。こうなると当然、イランの綿花栽培はロシア綿織物業に組み込まれ、直接の影響を受けざるをえなくなった。たとえば 1 プード(16.38 キログラム)の綿花価格は 1913 年に 52.1 クランであったのに、1920 年ロシア革命による市場閉鎖によって輸出が中止されると、20.4 クランと 7 年前の半額以下になった。このため、イランの「綿花栽培は採算性ある他の農作物栽培に移行」(注14)を強いられることになった。ここからも、ロシア綿織物業への原料供給地に転化されたイランの状況が読みとれる。

3. 国内流通ルートの変化

イランの貿易相手国がイギリス一辺からロシアにより依存してゆくにつれて、国内の流通ルートの持つ比重も変わっていった。

ところで、イランの消費地は北西のタブリーズ、北東のマシュハッド、南部のシーラーズに囲まれる三角形内にあった。三角形の重心テヘランには、頂点から伸びる 3 ルートと辺を横切って伸びる 3 ルートが集まっていた。イラン国内でのこれらルートの先端に、イランの重要な都市が位置していたのである。

六つのルートは、次のとおり。

(イ) トレビズンド → (トルコ領アルメニア) → タブリーズ → テヘラン。750 キロメートル。

- (a)ポチ→(ロシア領アルメニア)→タブリーズ→テヘラン(エレバン～テヘラン。900キロメートル)
 - (b)ラシュト(エンツリ)→テヘラン。320キロメートル。
 - (c)バンドレアッパス→ケールマン, ヤズド→テヘラン。1250キロメートル。
 - (d)ブシュレ→シーラーズ, イスファハーン→テヘラン。650キロメートル。
 - (e)バグダッド→ケールマーンシャー, クルド地方→テヘラン。500キロメートル。
 - (f)ヘラート(現パキスタン領)→マシュハッド, ニンジャプール→テヘラン。150キロメートル。
- 18世紀初頭からスエズ運河が開通する1869年まで、(i)のタブリーズ・ルートが重要な貿易路であった。30～

40年には貿易総額の3分の1～4分の1を扱った(注15)。50年代から69年までこのルートの最盛期には、イギリス商品が総通過額の平均70%を占め、64年には87.5%を占めた。輸出では生糸・絹が48～66年平均で55%を占めた(注16)。また、タブリーズ・ルートを形成する(i)トレビゾンド経由と(ii)ポチ経由の貿易額の比率は、1848年に輸出額15万4000と19万各ポンドに分かれていた。ただし、輸入額は(i)トレビゾンド経由がイギリスからの大量輸入のためずっと大きかったはずである。タブリーズ・ルート((i), (ii))こそ、大量のイギリス商品の流入、生糸・絹の輸出、さらに、ロシアへの輸出と西欧への輸出が半々になっていたことの3点から、1850年代のイラン貿易の型を写し出している。

スエズ運河の開通とイラン南部の治安確立に伴って、イギリスは徐々にペルシャ湾ルートから取引を始めた。また、ロシア側の事情ではポチからチフリスにいたるポチ・チフリス鉄道が開通(1872)すると、(ii)ロシア向けタブリーズ・ルートも貿易量が減った。こうして徐々に同ルートは重要性を失った。

タブリーズ・ルートに代わって、イギリス貿易を支えたペルシャ湾ルート((iii), (iv))は、19世紀末までに貿易額を拡大した。1889年には第10表のように、輸入額の43.9%、輸出額の53.0%を占めた。しかし、1913/14年には輸入額の20%、輸出額の15%がこのルートに依存するに限られた。このルートによる貿易額は減少したが、89年には30万、1913～14年には110万ポンドの入超と(注17)、イランの国際収支を大きく悪化させるルートであることは変わらなかった。

ロシア貿易はポチ・チフリス鉄道が開通し、さらに、1882年チフリス・バクー鉄道が完成して、コーカサス横断が可能になると、ますますカスピ海ルート(iii)が重要になった。ラシュトやエンツェリ(現バンドレ・パハラビー)やアストラバード(現ゴルガン)を経てテヘランにいたるルートである。両ルートで、89年に輸入が90万ポンド(22.7%)、輸出が50万ポンド(18.2%)となった。前述したタブリーズ・ルート貿易(トレビゾンド向を除く)がかりに全部ロシア貿易としても、輸入が33万、輸出が55万ポンドであって、ロシアとの貿易はカスピ海ルートに依存していることがわかる。とはいえ、ペルシャ湾ルートによる貿易額の3分の2ほどであり、当時のイランにおけるイギリスのロシアに対する優位がここにも見られる。

こうしたロシア貿易の拡大は、チフリス・バクー鉄道

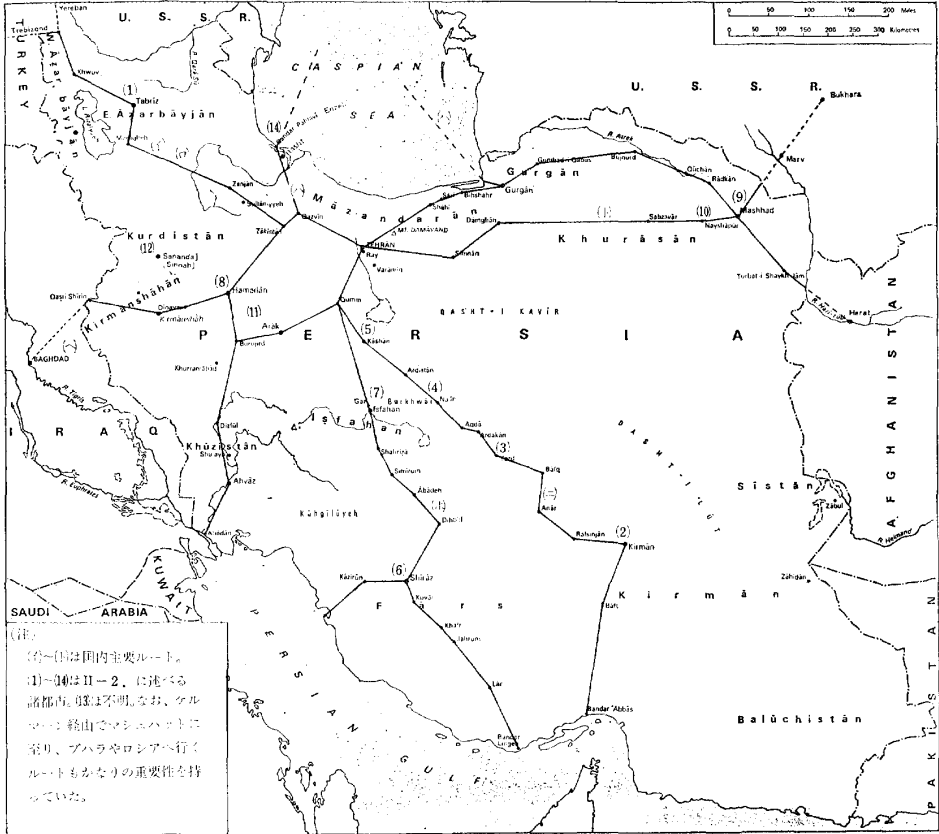
第9表 イランの綿花主要輸出相手国 (単位: トン)

	ロシア	イギリス	ロシアの占める割合 (%)
1888	7,912		
90*	5,616	5,438	50.8
91*	4,975	2,867	63.4
92*	6,802	2,179	75.7
92～96	10,139		
1897～1901	14,169		
01	14,496		
02	14,922		
03	17,887		
04	15,201		
05	17,265		
06	18,673		
07	17,248		
08	17,215		
09	23,456		
10	24,832		
11	23,817		
12	26,912		
13	26,388		
13**	25,571	1,139	95.7
20	85	331	20.4
21	1.3	1,490	0.0
22	3,112	4,004	43.8
24	10,905	2,466	81.6
28	18,980	1,320	93.5
30	10,000	470	95.5
33	9,840	1,810	84.5
36	18,030	74	99.6

(出所) 1883～1913年は、Entner, M., *op. cit.*, p. 73.

*は90～92年は、Tomara, M. L., "Ekonomicheskoe Polozhenie Persii," (Saint Petersburg, 1895. in ed. C. Issawi, *op. cit.*, p. 250. なお、トマラの数値はブードをキログラムに換算して作成。**)は1913年以後は、高橋高貞訳『ロシアの対イラン政策』(資料丙第301号C.) 東亜研究所 1942年 94～95ページ。

第1図 イランの国内主要ルート



の完成と83年、ロシア産業資本家の後押しによる関税法の改正に依った。つまり、この改正によってロシア領経由の中継貿易が5カ年禁止されたのである。これにより禁止前にロシアからの輸出が442万ルーブル、コーカサス経由の中継貿易が900万ルーブルあったのに対して、

禁止後の1891～1900年平均で輸出1437万ルーブル全部がロシア商品となった(注18)。実額1000万ルーブルのロシア商品が輸出増になった。こうして、ロシアのイラン進出の萌芽が形成されると、カスピ海ルートの持つ重要性は増加していった。

第10表 19世紀末イランの貿易ルート別貿易額 (単位: 1,000ポンド)

	輸入額	比率(%)	輸出額	比率(%)	計	収集年次
タブリーズ路 (トンビゾンドー英 国)	906 (574)	23.0 (14.5)	588 (36)	21.4 (1.3)	1,494 (610)	1889
カスピ海路	895	22.7	501	18.2	1,396	1883
マッシュハット 路	17	0.4	18	0.7	35	1889
ペルシャ湾 路	1,734	43.9	1,457	53.0	3,191	1889
バグダット 路	394	10.0	183	6.7	577	1890
計	3,946	100.0	2,747	100.0	6,693	

(出所) Curzon, N., *op. cit.*, vol. 2, pp. 563-577. より作成。

このほかに、(イ)バグダッド・ルート、(ロ)ヘラート・ルートも存在したが、年とともに重要性は失われた。これらイラン国内のルートの貿易量は、第10表のとおりである。以上のように、1850年のイラン貿易の型を写し出した国内ルートは徐々に、新しい要因によって南方・北方ルートに代わっていった。

(注1) ここで言う伝統的産業とは、20世紀以前のイラン社会に土着し、固有な起源を持つ諸産業を意味している。19世紀後半からイラン各地に点々と作られた「近代の工場」を、ここでは考察から除いた。西欧の模倣と受容の結果、官営工場として作られたが、結果は好ましくなかったからである。

(注2) Bosworth, C., *The Ghaznavids 994-1040*, Edinbargh, 1963, pp. 149-150.

(注3) カージュール朝は1779~1925年まで存続した。1代 Aqā Muḥammad Khan (1779-97)から3代 Muḥammad Shāh (1834-48)、と4代 Nāṣir ud-Dīn Shāh から6代 Aḥmad Shāh の時期に一応分けられる。

(注4) Lambton, A. K., "Persian Society under the Qājārs," *Journal of the Royal Central Asian Society*, vol. 48 (April 1961), p. 125.

(注5) Fraser, J. B., *An Historical and Descriptive Account of Persia*, London, 1833, p. 298.

(注6) L. Berezin, "Puteshestvie po Severnoi Persii," 1852, in *The Economic History of Iran 1800-1914*, ed. Issawi, C., Chicago, Univ. of Chicago Press, 1971, p. 108.

(注7) *Ibid.*, p. 258.

(注8) Yaganegi, E. B., *Recent Financial and Monetary History of Iran*, New York, 1934, pp. 91-104. ヤガネギによる1885~1900年の輸出入額は、カーゾンの数値にほぼ一致している。しかし、1910年代になると第1表のように輸入で2~2.8倍、輸出で2.9~3.4倍になっている。これほどの相異が生じた理由は不明である。なお、こうした大幅な国際収支の赤字の決算について、たとえば19世紀中頃、タブリーズ貿易(後述)では、このルートによる輸出不足分を「関税を通過しない真珠、ダイヤモンド、カシミア・ショール」で補ったと言われる (Issawi, *op. cit.*, p.108)。また、歳入の増加のため、(イ)マシュハッド(聖地)への外人巡礼者の支出、(ロ)外国大使館の支出、(ハ)ロシアなどへの出稼ぎ労働者からの送金、(ニ)外国企業のロイヤルティ、(ヘ)密輸出等がなされ、大幅な赤字を縮小してい

た (Issawi, *op. cit.*, pp. 128-129)。しかし、本稿では貿易統計を用いてイラン経済を大きく描いてみた。

(注9) Curzon, N., *Persia and the Persian Question*, London, 1892, reprinted London, Frank Cass, 1966, vol. 2, p. 561.

(注10) Entner, M., *Russo-Persian Commercial Relations, 1828-1914*, Florida, 1965, p. 71. 別の資料 Yaganegi, *op. cit.*, p. 92では砂糖9500万フラン(≒170万ポンド)となっている。

(注11) Entner, *op. cit.*, pp. 8-9.

(注12) 高橋高貞訳『ロシアの対イラン政策』(資料丙第301号, C) 東亜研究所 1942年 88ページ。

イランの綿布輸入先 (単位: トン)

年	ロシアより	イギリスより	年	ロシアより	イギリスより
1913	9,177	11,326	1928	9,000	4,250
20	3.9	7,202	29	6,900	2,790
21	74	11,427	30	5,740	2,200
22	110	11,443	31	6,470	2,330
23	281	12,366	34	5,740	636
24	334	13,342	36	6,389	729
			37	8,664	1,123

(イ) 同書 88-89ページ。

(注13) Issawi, *op. cit.*, pp. 245-246.

(注14) 高橋高貞訳 前掲書 93ページ。

(注15) Issawi, *op. cit.*, p. 108.

(注16) *Ibid.*, p. 114.

(注17) *Ibid.*, pp. 83-85.

(注18) 不明 "Trebizond and Persian Transit Trade," *Royal Central Asian Journal*, vol. 31-IV, Dec. 1944, p. 293.

II 生産から見たイラン経済

1. 原料作物の生産と消費

イラン繊維業の発展程度を知るために、生糸と綿花の生産量を示し、どの程度国内で消費されたかを見よう。

イラン経済に大きな影響を与えた生糸の生産量から見ると、1830年代から64年までイラン最大の生糸生産地ギラン州は、平均139万ポンド(lbs)を生産し、額にして100万ポンドに達した。(イラン全体の生産量を示す数字は欠如している)。絹はベルシャ商品の最も重要な商品になった。しかしながら、生産量の急増はベルシャ人の活動の成果ではなく、ギリシャ人商人などの資本・技術提供に依っていた(注1)。

ともかく、64年に生糸生産は頂点に達した。68~69年からは生糸の世界市場に日本が参加したため価格は低落し、ギラン州の生糸輸出額は半分以下になった。70年に

資料

第11表 イランの生糸生産 (単位: 1,000ポンド)

	イランの 生産量	ギラン州 の生産量	ギラン州 の生産額	マザンダラ 州の生産量
1637	4,320	1,628		428
70	6,072	2,760		552
1744		360	120	
71				18~19
1822		840	240	
36		1,800	2,000	
39		1,170		
40		1,430		
43		1,300		
44		1,000	450	
64		2,190	1,000	
65	(617)	1,230 (485)	667	(18)
66		1,351	743	
67		1,110	507	
68		889	451	
69		714	302	
70		922	399	
71		773	286	
72		632	221	
73		766	225	
74		1,422	330	
75		541	105	
76		578	215	
77		210	123	
78		708	135	
82		390		
85	608	455		35
86		380		
87	662	554		35
90	560	463		38
1905	1,213	993		66

(出所) 1886年までは、Curzon, *op. cit.*, vol. 1, p. 367. 1887年以降は、Lafont, F. and H. L. Rabino, "L'industrie séricole en Perse," in ed. Issawi, *op. cit.*, p. 253. なお、カッコ内の65年もこれによる。キログラムはポンドlbsに直し、1744, 71年の生産額は1トマン≒4ポンド(Curzonによる)を選んで概算した。

再び外人による改良策の結果、生産量が増加した。1904/05年には121万ポンド(lbs)と、1865年度のギラン州の生産量に等しくなった。しかし、価格は40万ポンドを超えず、生糸の輸出寄与率は低下した。

次に、地方別生糸生産量は第12表のようである。1865年以降、ギラン州が80%強、マザンダラン州が5%を生産し、1865年から20~40年間は両州の占める比率が増大した。

繭・生糸の国内消費量を推測させる資料に関しては、カーズンがわずかながら示している。「現在(19世紀末……筆者)ロシアやマルセイユに輸出される繭は、ギラン(マザンダラン)、アゼルバイジャン」のものである。「後2地方(ホラサーン、中央地帯……筆者)での生産物は、ほとんど地方消費的である」(註2)と述べている。つまり第12表より両州の生産量、約3万ポンド(lbs)が国内で消費されたのである。総生産量の5.3%にあたる。

またカーズンはホラサーン産の大半の繭・生糸は、ヤズド・カーシャン・イスファハーンに送られたと述べ、これら地域の「織機は毎年、約1万5000マン(9万7500lbs)」(註3)を使ったと述べている。さらに、ギラン・マザンダラン産の4万5000マンのうち、1万マンがバグダッドへ輸出されるか、カーシャンやイスファハーンで消費され、残りがロシアと西欧に輸出されたと伝えている。1878年のイランからバグダッドへの主要輸出品の中に繭・生糸は入っていない。だから、この繭・生糸の大半がバグダッドへ輸出されたとは考えられず、3~5000マンはここで消費されたのであろう。すると、ホラサーン産1万5000マンとこの3~5000マン(1万7000~13万lbs)が、「地方消費」されたと一応仮定できる。その量は繭・生糸生産量の21%ほどになる。

第12表 イランの地方別生糸生産量 (単位: 1,000ポンド(lbs))

	Dvseignun 1865	Rondon 1887	J. Rabino 1890	1905	Curzon 1885
ギラン	485.1 (78.6)	553.5 (83.7)	463.1 (82.2)	992.3 (81.8)	455 (82.4)
マザンダラン	17.6 (2.9)	35.3 (5.3)	38.4 (6.8)	66.2 (5.5)	35 (6.3)
アストラバード	35.3 (5.7)	22.1 (3.3)	16.1 (2.9)	99.2 (8.2)	16* (2.9)
ホラサーン	8.8 (1.4)	33.1 (5.0)	32.4 (5.8)	33.1 (2.7)	33* (6.0)
アゼルバイジャン	70.6 (11.4)	17.6 (2.7)	13.2 (2.3)	22.1 (1.8)	13* (2.4)
中央(ヤズド、カーシャン)					
計	617.4 (100.0)	661.6 (100.0)	563.2 (100.0)	1,212.9 (100.0)	(552) (100.0) (608)

(出所) Lafont, F. and H. L. Rabino, *op. cit.* 原資料はトンで表示されているが、lbsに換算した。なお、Curzonの項は、Curzon, N., *op. cit.*, vol. 1, pp. 367-369. Curzonの計552は集計額で(608)は第13表より。

第13表 イランの地方別繭・生糸生産量

地 方	タブリーズ・マン	ホンド (lbs)
ギラン・レシュト	30,000	195,000
マガンダラン	15,000	97,500
ホラサーン・セルシエバル	20,000	130,000
計	65,000	422,500

(出所) Curzon, *op. cit.*, vol. 2, p. 497.

「地方消費」部分を示す数値は、部分的ながら1848年にも存在する。ギランで生産された100万ポンド (lbs) の繭・生糸のうち、ラシュトだけで2700ポンド (lbs, 0.3%) が消費された。さらに、バグダッドへの輸出と「中部ペルシャや南部ペルシャのさまざまな地域での消費」(註4) が、約24万ポンド (lbs) あった。ここでも前述の理由によって、3分の1～2分の1つまり8万～12万ポンド (lbs) が国内で消費されたと考えられる。結局、イランで「地方消費」された繭・生糸は、約3万ポンド (5.3%) から12～13万ポンド (lbs, 21%) ほどであったと一応推定できるだろう。

綿花の国内消費部分を推定させる資料は19世紀後半にはない。ゴレリコフは1913年について、輸出が2万5000トンで生産量が3万3000トン(註5)と記している。これによるとほぼ4分の1が消費されたことになる。また、ヤガネギによると、1927年の生産量2万1600トン、30年3万2800トン(註6)と記している。輸出品と比較すると27年で6.0% (28年の輸出品と仮に比較) と30年、69.4%となる。三つの値にバラつきがあるが、イランへの綿布の大量輸入とイランからの綿花の大量輸出から、70%近い国内消費は考えられない。ここでは一応、6～25%が「地方消費」されたと推定しておこう。これらの綿花は、ロシアへ輸出された綿花の残余であって、「手製の機台で紡がれ、家内消費的に吸収された」(註7)のである。

2. 主要都市の生産事情

主要都市の産業を、(a)絹織物業、(b)綿織物業、(c)毛織物業、(d)カーペット生産、(e)その他の5項目にまとめて見てゆこう。

(1) タブリーズ (Tabriz)

貿易ルート((i)・(ii))の中心都市で、1889年に人口は17～20万であった。60年頃には3114人の商人と職人がいて、2676人が市内に、438人が郊外に住んでいた。89年には166のキャラバンサライ、3922の仕事場があった。ただし、大半は捨てられた仕事場であったと言われる。

アゼルバイジャン地方で(d)カーペット生産が繁栄して

くると、この都市にもカーペット織りの仕事場が現われた。しかし、89年頃には「カーペット工場はなく、ほとんどの仕事は家庭内で女たち」(註8)によってなされた。ところが、20世紀初頭にはすでに大規模なカーペット工場が成立していた。最大の仕事場はロシア人が所有する、1500人を雇用し、織り場や染色場である数個のレンガの建物を持ち、しかも働き手のパンを毎週1万個焼く製パン場すら備えていた。最も高価な羊毛・絹製のカーペットを一度に100枚ほど織ると言われ、毎年5万ポンド生産した(註9)。1902年のカーペット輸出72万2000ポンドの7%弱にあたる額である。

この頃、タブリーズにはカーペット仕事場が100店あり、1200の織台があった(註10)。オービンによるロシア人所有の工場に備わっていると思われる200台を除けば、平均10台が1仕事場にあったと考えてよい。タブリーズについては、(d)カーペット生産以外は実態がわからない。

(2) ケルマーン (Kirmān)

貿易ルート((iii))の中心都市。「ケルマーンのバザールは、この町の商工業の名声に値する」(註11)と言われるほど、商工業は繁栄していた。65年に人口3～4万人、250人の商人がおり、このうち17店が輸入品を扱っていた。

1850年に2200のシヨール織台、220の羊毛織台があった。4万～4万5000ポンドを生産した。50年のこれら織物((a), (c))の輸出額66万5000ポンドの6～6.7%にあたる。合計2420台の15%にあたる325台は、近くの9村に集中し7000ポンド以上を生産した(註12)。65年には120のシヨール織り企業があった。50年の織台数が維持されているとすれば、1企業18台強を備えていたことになる。このように、19世紀のケルマーンでは主要な職業が良質なシヨール生産であった。

これに対して、(d)カーペット生産では1871年に六つの良い仕事場があったにすぎず、台数は30台より少なかった。なお、(b)80の綿織物の仕事場がこれ以外にあった(註13)。ところが、10年後には市内と周辺で数百のカーペット織の仕事場が簇生し、最大の仕事場は30人ほどの織り手を雇用した。1900年には市内で1000台以上となり、20年代には5000台となった。(d)カーペット生産では実際の活動にたざさわる2～3人の子供を監督するマスター1人が、1台の織台を動かした(註14)。この頃には、シヨール織物業((a), (c))も繁栄して1000台の織台があった。これらは1850年代における2000台の半分となったが、毎年30万トマン(5万5600ポンド)を輸出していた。また、シヨール織物業((a), (c))でも、カーズンの観察によれば(d)カーペ

ット生産と同じく、織台は不潔で暗い穴の中で織られ、そこでは、男や少年たちは半裸の姿で働いていた。このショール織物業の5万6000ポンドは、1910年代ショール・カーペット輸出の22%にあたる。以上から、ケルマーンは1900年頃には、(d)カーペット生産で織台が1000台((a)、(c))ショール織物業同じく1000台、(e)羊毛織物業も同じく300台で、イラン最大の生産都市であったと考えられる。

(3) ヤズド (Yazd)

ケルマーンに次いでバンダレアッバス・ルートの2番目に位置する都市である。1850年頃に、(a)300~350の絹織台、(b)1300の綿織台があった。これらは衰退してはいたけれども、カーズンによれば、「絹織物業は以前に、この地方の主要な産業であった。19世紀中頃には大量のマルベリーが植えられており、9000人を雇用する1800ほどの仕事場(Factory)が存在した」(注15)のである。20世紀初頭にも、2000台の絹織台を持つ400の仕事場があり、1仕事場に平均5台が備えられていたことになる。

(b)綿織物業では、この都市はインドから6万5000ポンドの綿織物(これの総輸入額の5.3%)を輸入し、トルコや北部イランからも6万5000ポンドの綿織物を輸入していたことになる。この輸入によって、1300台を持つ綿織業は衰退気味であった。1900年頃には10万トマン(1万8000ポンド)の綿織物を作る800の仕事場があって、2000台の織台が動いていた。1仕事場に平均2.5台が備わっていたことになる。このように、ヤズドの綿織物業は綿織物輸入額180~230万ポンドの1%ほどにあたる生産物を作っていた。20世紀初頭にも、(a)絹織物業、(b)綿織物業は存在していたのである。

(4) ナーイン (Nāim)

ペルシャ湾ルート3番目にある内陸都市。20世紀初頭に(c)200台の羊毛織台があった。ケルマーンと並んで、イラン毛織物業の中心地であった。

(5) カーシャン (Kāshān)

パンタレ・アッバスからのペルシャ湾ルート(=)の第4番目の都市である。カーシャンは(a)絹織物の町として有名で、この絹織物はずっと以前から東洋で有名であった。この周辺で蚕が飼われ、ギラン州からも原料蚕が移入されてきていた。ヘルベルト(T. Herbert T)は、1627年に「この町はヨークやノルヴィチに優るとも劣らない」(注16)と述べたほどである。

1850年には人口3万で、770の仕事場と商店があり130人の商人がいた。このうち28店が輸入品を扱った。ほかに80人の銅・鉛の細工人もいた。(a)絹織物業では800の

織台があり、当時1都市にある台数としては最多であった。また、(b)綿織物業も盛んで、「多量の」綿糸がろば荷で、カスピ海沿岸のアストラハーンに送られていたと言われる。しかし、1840年にはすでにイギリス商品の輸入がカーシャンの大きな仕事場(factory)を破壊(注17)していたのである。イギリス商品を買って「ダンピング行為」を行ない、カーシャンの産業を破壊したのは、地租を免除された大きな貿易商であった。ここにも、大商人と手工業者の結びつきがゆるんでいく例が示される。このように一面で産業衰退の兆しが現われつつも、いまだかなりの活動がカーシャンでなされていた。

19世紀末にも綿と混紡された美しい絹や絹織物がピロードとともに作られていた。20世紀初頭(a)絹織物業では、1850年の織台数の4分の1に減少したが、まだ月産400個を製造する200の絹織台があった。また、(b)綿織物業では100の仕事場があった。ヤズドの例より1仕事場2~3台とすると、200~300の織台があったと推定できる。以上から、(a)絹織物業で有名だったカーシャンでは、20世紀初頭以前より衰えながらも、(a)絹織物業、(b)綿織物業が存在したのである。

(6) シーラーズ (Shīrāz)

ブシュレ港からのペルシャ湾ルート(≠)の最初の都市である。50年頃には刃物類が生産された。この生産以外に商品集散地の役割を果たし、ペルシャ商人の大半がここに代理店を持っていた。50年に1200の商店や仕事場があり、このうち100店がイギリス綿布(白と色物)の8万片(6万5000ポンド)を輸入した。さらに、タブリーズからも4万ポンド以上を輸入しており、合計10万5000ポンドは同年輸入総額の3.6%にあたる。

(7) イスファハーン (Isfahān)

ブシュレ港からのペルシャ湾ルート2番目に位置する都市である。ファトフ・アリー(1797~1834年)の時代には、絹織台が1万2000あった(注18)。しかし、ヨーロッパ商品の流入とイラン宮廷の嗜好の変化で、1845年には数個しか残っていないと言われる。ともかく、1850年には(a)200台の絹織台があった。カーシャン、ヤズドについて綿織物業では3番目に盛んな都市である。(b)綿織物業の織台数は判明しない。しかし、「綿織物の製造は大規模になされ、この製造が近郊の町や村の住民に仕事を与えて」(注19)いた。(b)綿織物業もある程度発展していたと考えられる。

19世紀後半には、マンチェスターはイスファハーン of 万能の機織業者(カーズン)とさえ言われ、綿織物の輸

入が大きな比率を占めた。イギリスから輸入された綿織物に手で染色して、キャリコを生産した。このようなキャリコが、イスファハーン固有のコダク織りとともにロシアのムスリム用に輸出された。

1900年には、(b)2000台の綿織台があり、ヤズドと並ぶイラン最大の綿織物都市となった。ヤズドと同じ台数だから、輸入額の1%弱の綿織物を生産したと考えられる。なお、1930年には557の織台があって、450万リアル(注20)を生産した。

さらに、イスファハーンではラビザジェによれば(a)カーペット生産が1920年以降盛んになった。1923年まではあまり発展しなかったが、1926年には以前の200台から4000台に増え、原料の羊毛が他地方から移入させることになった。1921年に1151の仕事場が40年には2673となり、ほぼ2.3倍に増えた。

以上のように、この都市は最初(a)絹織物業、(b)綿織物業、(c)金銀細工が繁栄した。19世紀末に(b)綿織物(加工)業が重要産業になり、1920年をすぎると(d)カーペット生産が中心になった。イランの伝統的産業の盛衰をそのまま現わしている。

(8) ハマダーン (Hamadān)

バグダッド・ルート(γ)のイラン国内2番目の都市である。ここで作られる皮製品は良質で、19世紀初頭から有名であった。ほかに、カーペット、粗綿織物も作っていた。1909~12年にはマシュハッドと並んで、八つのモロッコ皮製造工場(マニファクチュア)があった。各々に40~50人の働き手がいた。こうした形態の皮製品製造は新しいもので、古い型は「5~10人の働き手を持つ多くの半田舎工場」(注21)による生産であった。逆に言えば、古い型の工場すら、5~10人の働き手を備えていたということになる。

(9) マシュハッド (Mashhad)

ヘラート・ルート(δ)の中心都市である。織物生産のほかに、ダマス風に金銀に象眼した刀剣の生産も有名であった。19世紀末に、(a)650台の絹織台と((a)、(c))320台のショール織台があった。(d)カーペット生産もなされ、良質なおリエント風カーペットを生産する40の織台があった。1872年に150の仕事場があり、若干のものでは100人の働き手を雇っていた(注22)。

また、1900年頃には(a)200台の絹織台を持つ100の仕事場があった。平均2台となり、ヤズドの平均5台よりも小さい。(a)絹織物業は19世紀末の650台から3分の1に減った。イワノフも、19世紀末の1200台から150~200台

第14表 マシュハッドの手工業仕事場数 (単位: 箇所)

業 種	仕事場数	業 種	仕事場数
麻 梳 織	90	美 術 塗 装	10
毛 布 製 業	20	織 機 台 用 平 板 製 造	9
織 物 製 業	65	織 機 台 用 平 板 製 造	8
カーペット製造	145	小 さ な 製 造	11
銅 器 製 造	78	鍛 冶	4
鍛 冶	45	製 絹 糸 本 り	15
縫 縫 業	70	絹 糸 繰 り	5
染 色	30	糸 繰 り	4
鞍 子	30	な め し	2
帽	15	ガ ラ ス 製 造	3
長 靴	13	鍛 冶	4
毛 皮 外 加 工	20	家 具 製 造	10
腸 履 の 物 製 造	20	植 物 染 料 製 造	14
靴 履 の 物 製 造	80		
靴 履 の 物 製 造	9	計	829

(出所) Абдуллаев, З. 3., *Формирование Рабочего Класса Ирана*, Баку, 1968, стр. 55-57.

に減ったと述べており、19世紀末の織台数には差がありながらも、20世紀初頭の数では一致している。さらに、(e)皮製造業では、ハマダーンと同じように1909~12年に、40~50人の働き手を雇用する八つのモロッコ皮製造の仕事場(注23)があった。以上のような(e)皮製造業以外に、(a)絹織物業、((a)、(c))ショール織業、(d)カーペット生産がなされ、各種の織物業が20世紀初頭に存続した都市と言える。

1930年代のマシュハッドでなされた手工業の仕事場数を示しておこう(注24)。

(10) ニシャプール (Nayshāpūr)

マシュハッドの隣町である。中世では良質リネルなどの生産で有名であった。1900年頃には(a)3~4倍の絹織台を持つ16の仕事場があり、合計50~60の織台数を有した。マシュハッドより平均織台数は多い。

(11) スルタナバード (アラク) (Sultanabad)

バグダッドルート(ε)の中心都市である。周辺の村々では、(a)カーペット生産が盛んであった。1871年には、周辺150の村々に5000台のカーペット織台があり、1村に30~40台が存在したことになる。1万人がカーペット生産にたずさわっていたから(注25)、1台に2人の働き手となり、既述の2~5人の子供と1人の監督織手(タブリーズ)に比べると少ない。この地方では、村々の家庭に織台が持ち込まれ、女たちが織っていたようである。

また、ツイーグラー社 (Ziegler D. Co.) の支配人が、20年前 (1874) にこの都市へ来たときには40の織台しかなかった。ところが、94年には市内で800の仕事場で、1200台以上、周辺で1500台、計約3000台があったと言わ

れる。500万クランを毎年生産(註26)した。この額は1889年に輸出したカーペットの合計330万クランのほぼ150%弱にあたり、少々大きすぎる。この都市は(a), (b), (c)の織物業から、(d)カーペット生産に特化していったようである。

(12) クルドスタン地方のシンネー地区 (Sinneh, 現 Sanandaj)

この地方も、(d)カーペット生産の中心地である。カーズンによればクルド族の女たちがカーペットを生産し、織台数も5000台あった。

(13) カイナート (Kainat, 現在のカインか?) 1871年に2000台のカーペット織台があり、1万2000人が働いていた。

(14) その他

1920年代のラシュトとエンツェリ (現バングレ・パハラビー) における手工業の仕事場数を記しておく。両市はカスピ海沿岸にある、ロシアとの貿易上重要な都市であった。

第15表 イラン2都市の手工業仕事場 (単位: 箇所)

ラシュト		エンツェリ	
業 種	数	業 種	数
貴金	45	靴 製 造	50
銅 冶	40	仕 作	47
細 工	60	帽 子 製 造	30
小 冶	60	ブ リ キ 職	26
帽 子 製 造	60	鍛 冶	27
大 工・家具師	40	工 具・家具師	10
長 靴 製 造	200	銅 細 工	8
製 本	10	な め し 皮 製 造	5
裁 縫 と 刺 し ゅう	220	毛 布 縫 合	7
毛 布 縫 合	100	貴 金	7
レンガ工場	34	ハ ン ダ 工	5
瓦 製 造	18	機 械 技 師	7
な め し 皮 製 造	16	タ バ コ 工 場 労 務 者	59
絹 織 物	4	ボ ー ト	12
計	907	計	300

(注) ラシュトは1926~27年, エンツェリは20年代のもの。

(出所) 第14表に同じ。

以上、都市の諸産業を五つの項目で見えてきた。多分、これらの都市において各産業を営んだ仕事場は、各産業で最大クラスに入る仕事場であろう。だから、他都市や他地域では、もっと小規模な仕事場で産業活動がなされていたはずである。しかし、ここでは、最大クラスの仕事場の状況を分析することで、19世紀後半から20世紀初頭における諸産業の最も傑出した部分での規模や生産を推定して、当時の諸産業の発展段階を考察してみたい。

3. イラン伝統的産業の発展段階

—— むすびに代えて ——

1850年以降、顕著になったイギリス綿製品などの輸入によって、イラン織物業は徐々に圧倒されていった。しかし、II-2.で見たように、イラン織物業は20世紀初頭にいたるまで、存続していたのも事実である。

(a)絹織物業では、「地方消費的」部分が大きかな推定で、3万ポンド(5.3%)から、12万~13万ポンド(21%)となる。生産された繭・生糸の5分の1以下を利用して、(a)絹織物業が営まれた。(b)綿織物業では1900年頃に6~25%が「地方消費」されたようである。(a)絹織物業の「地方消費」率とほぼ同じであるが、綿花は自給の意味での「家内消費」により用いられたようである。だから、(b)綿織物業の中心、ヤズドやイスファハーンでも輸入綿織物の1%未満を生産しただけで、発展的には営まれなかったようである。

1850年頃にはイギリスやインドから輸入した粗綿織物を、ヤズドなどではイランの古い染色法で仕上げ、ロシアや内陸諸国の穆斯林用に加工して輸出した。だからこそ、第2表で見たように、123万のうち4分の1にあたる34万ポンドの綿織物が再輸出されたのである。この時期には、イランの綿織物業は近郊住民に就業機会を与えていたと言えよう。ところが、1870~80年に開始されたロシア産業革命によって、今までとは逆にロシアがイランに綿織物を輸出してくると、もはやイラン綿織物にとって頼みの綱である再加工輸出すら不可能になった。イランの(b)綿織物業にとっては、これが直接の痛手となった。もちろん、潜在的にはすでにイギリス綿織物によって、イラン綿織物業が圧倒されていたのであったけれども。

また、(c)毛織物業は50~70年までは、ロシアや内陸アジアに製品市場を期待できた。しかし、70年以降ロシアがイランに製品を輸出してくると、イランの都市で(c)毛織物業は細々と生産されるにすぎなくなった。

このように見えてくると、イギリスとロシアの織物業の影響で、イランの織物業は全般的に衰退したと考えられる。この中で、(a), (c)のショール織物が活気を示し、(d)カーペット生産だけが著しい活気を示した。先に見た都市別の産業事情から考えると、(a)絹織物業で19世紀中頃の水準を維持かまたは発展させ、しかも重要な比率を占めた都市はヤズドだけであった。(b)綿織物業ではヤズド、イスファハーンがこれにあたる。(c)羊毛や(a), (c)ショール織物業ではケルマーン(1850年の半分となった)

がこれにあたる。このように、かつてイラン各都市で生産された(a), (c)の織物業が、特定の一都市でのみ維持・発展ができたにすぎない。いわばイラン国内での一都市の特化である。もちろん、これらの都市では他織物業も営まれて量的に見れば、これら特定都市は(a)絹織物業では不明ながら、(b)綿織物業ではヤズド、イスファハーンが綿織物輸入額の1%, (c)羊毛、ショール織物業ではケールマーンが、絹・羊毛織物輸入額の13.2~14.7%を占めたのである。

これに対して、(d)カーペット生産は多くの地方や都市で営まれ成長した。いわば、イラン1国の特定部門への特化である。タブリーズやマシュハッド、ケールマーンには大規模な仕事場すらできた。1500~2000人を雇用したタブリーズの工場、100人を雇用したマシュハッドの仕事場がその中でも最大級で、タブリーズでは1仕事場の平均台数が10台(最大の上述工場を除いて)になっていた。また、(e)その他のうち、皮製品製造がイラン得意の分野として発展した。40~50人を雇用するハマダーンやマシュハッドの仕事場がその例である。この分野では旧来の仕事場すら5~10人を雇っていた。

イランの伝統的産業は、それぞれの部門ごとにこのような不均衡発展をゆるやかに示していた。ここで、他の中東都市における織物業と比較してみよう。

中央アジアにおける最大の生産都市ブハラ(註27)と比較してみよう。ブハラでは多くの産業が存在し、なかでも最も発展していた織物業は第16表のような状況にあった。最大の仕事場所有者は120台の織台を持っていた。また、別の例では80人を雇っていた。こうした32人の仕事場所有者は平均で19.7台を所有しており、120台を所有する最大例を除いても、平均16.5台所有していた。

第16表 ブハラの織台数と仕事場所有者数

織台規模	仕事場(所有者数)	織台数
~25	9	390
24~20	4	80+ α
19~15	3	45
14~10	5	58
9~6	5	36
5~	6	22+ α
計	32	631+ α

(出所) Сухарева, О. А., *Позднефеодалной Город Бухара Конца XIX-начала XX века*, Ташкент, 1962, стр. 85-88.

(注) その他4~5人の仕事場の所有者が1人いる。なお、織台数が判明せず、働き手がわかるように同様な例より推定した。

ところで、ブハラの場合には1仕事場に何台が備わっていたかを示す資料はない。ただ、上述した120台を所有した織物業者でも、10~12台を自分の仕事場に備え、他を個々の家内手工業者の家に置いていた。また、20台を所有していた織物業者は10台を自分の仕事場に備え、他を家内手工業者の家に置いていた。30台を所有していた人は、5~6の仕事場に分けていた。だから、ブハラの最大所有者でも1仕事場に10台以上を備えてはいなかったと言えよう。他の所有者も同じであろう。とすれば、1仕事場には6~10台ほど、小さいところには3~4台が備わっていたと考えられる。

イランの織物業を考えると、(d)カーペット生産以外では、1仕事場の平均織台数は2~5台と考えられる。この規模はきわめて大まかに言えば、ブハラの仕事場よりも若干小さいほどであろう。しかし(d)カーペット生産では、タブリーズの平均は10台だし、マシュハッドの例では100人を雇用している。これから考えると、(d)カーペット生産の工場規模は、ロシア人所有の大工場を除いても、ブハラの織物業の規模よりも若干上か、同じであろう。

ところが、このカーペット業においてすら、生産関係ではブハラよりずっと遅れていた。サイクスも言うように、実際にカーペット生産にたずさわったのは子供であった。また、若干活気を示した((a),(c))ショール織物業でも、この状況はほとんど変わっていない。つまり、イラン織物業で最も発展し、規模の点ではブハラ織物業を若干上回ったカーペット業も、多く子供労働に依存していたのである。これに対してブハラの織物業の主要な担い手が、かなり豊かで自由を享受した雇われマスター(ハリフ)であった(註28)。たとえ、カーペット生産の特殊事情があるにしても、イランのカーペット業も各織物業も、かなり豊かで自由を享受できた独立ハリフ層を、大量現象としてイランに生み出せなかったようである。ただし、イランの得意な皮製品製造業はブハラのそれをずっと上回っていた。

より詳細な生産諸関係の解明が必要だとしても、(a)~(c)織物業では規模の点でブハラに劣り、(d)カーペット生産では上回ったものの、仕事場内部に存在した諸関係はいずれも遅れていた(註29)。こうした状況は、1850年以前に存在したイラン織物業の内的発展の弱さの結果であったし、19世紀中頃以降、急激に流入したイギリスとロシア商品による国内産業の衰退の結果でもあった。原料供給にしか生きる道が閉ざされたイランは、北部地方をロ

シアのルーブル支配圏に切りとられ、南部地方をイギリスのポンド支配圏に切りとられ、独立国家という実態は外国経済攻勢の前に消失してしまったのである。

(注1) Issawi, *op. cit.*, p. 231.

(注2) Curzon, *op. cit.*, vol. 1, pp. 367-370.

(注3) *Ibid.*, p. 497.

(注4) Muhammad Salmon Hasan, "al-tataw-wur al-iqtisadi fi al Iraq" (Beirut, n. d. pp. 128-129), in ed. C. Issawi, *op. cit.*, pp. 120-121.

(注5) Гореликов, С. Г., *Иран.* Москва, 1961, стр. 192.

(注6) Yaganegi, *op. cit.*, p. 6.

(注7) Fateh Mustapha khân, *The Economic Position of Persia*, London, P. S. Kings & Son, 1926, p. 22.

(注8) Curzon, *op. cit.*, vol. 1, p. 521.

(注9) Abdullaev, Z. Z., "Promyshlennosti zarozhdenie rabocheho klassa Irana v konste XIX-nachale XXvv" (Baku, 1963), in ed. C. Issawi, *op. cit.*, pp. 297-298. Aubin, Eugène, *La perse d'aujourd'hui*, Paris, 1908, pp. 42-43. これによれば「1人の豊かなロシア人は2000人の男と子供を雇用し、200台の織台を動かして」いた。多分、同一人物であろう。

(注10) Issawi, *op. cit.*, pp. 302-303. なお、1平方インチ15×15本の糸でカーベット9×12平方フィートをつくるのに、5人の子供と1人の監督者を必要とした。

(注11) Curzon, *op. cit.*, vol. 2, p. 245.

(注12) Issawi, *op. cit.*, pp. 267-268. 以下に述べる他都市において、20世紀初頭の産業事情は別に示さない限りこれによっている。

(注13) *Ibid.*, pp. 267-268.

(注14) English, P. M., *City and Village in Iran; Settlement and Economy in Kirman Basin*, Madison, Univ. of Wisconsin Press, 1966, pp. 28-29. なお、ここで引用されている書物は、Sykes, P. M., *Ten Thousand Miles in Persia or Eight Years in Iran*, London, 1902, pp. 199-200.

(注15) Curzon, *op. cit.*, vol. 2, p. 242. ただし、1800の仕事場に300~350の網織台では少なすぎる。また、20世紀初頭の網織台数について、イワノフは「網織物業は衰退し、養蚕従事者はケン栽培に移らねばならなかった」と述べている。Иванов, М. С., *Иран-*

ская Революция 1905-1911 годов, Москва, изд. ИМО, 1957, стр. 40. これに対して、アブドラエフは本文のように言っている。また、1930年代には4000の網織台が市場向網織物を製造した。「1日1000ザール(1ザール=1.04か1.12キロメートル)が織られ、1年に720万ザールが生産された」と言われる。Рабизаде, М. М., *Развитие Капиталистического Предпринимательства В промышленности Ирана В 30-х годах XX Века*, Ваку, изд. "эпм," 1970, стр. 11. 30年代には手動カーベット織台が2万5000~3万あったとも言われる。"Agricultural and Industrial Acitivity and Man Power in Iran," *International Labour Review*, vol. LIX, No. 5, 1949, p. 556.

(注16) Ahmad Ashraf, "Historical Obstacles to the Development of a Bourgeoisie in Iran," in *Studies in the Economic History of the Middle East*, ed. Cook, M. M., London, Oxford Univ. Press, 1970, p. 317.

(注17) *Ibid.*, p. 325.

(注18) Lambton, A. K., "Persian Trade under the Early Qajärs," in *Islam and Trade of Asia*, ed. D. S. Richards, Oxford, Bruno Cassirer, 1970, p. 239.

(注19) Issawi, *op. cit.*, pp. 267-268.

(注20) Рабизаде, М. М., чит. по. Развитие, стр. 11. なお、カーベット織台以外の台数も1926年の100から1927年に2000にふえたと言われる。

(注21) Abdullaev, Z. Z., "Promish," in ed. Issawi, *op. cit.*, pp. 297-298.

(注22) Issawi, *op. cit.*, pp. 302-303.

(注23) Рабизаде, М. М., чит. по. Развитие, стр. 11.

(注24) Абдуллаев, З. З., *Формирование Рабочего Класса Ирана*, Баку, 1968, стр. 56-57.

(注25) Curzon, *op. cit.*, vol. 2, p. 524.

(注26) "Report on Ispahan," in ed. Issawi, *op. cit.*, p. 305.

(注27) Сухарева, О. А., *Позднефеодальный Голод бухара Конца XIX-Начала XX Века*, Ташкент, 1962, стр. 85-88. プハラは三汗目の一つで、1500~1559年のシャイバニ朝後、ペルシャに支配され1753年に解放された。しかし、1868~69年以後

はロシアの保護国となり、経済活動の点でのみロシアより独立していた。首都ブハラはイランのマシュハッドの北東にあるシルクロード沿の都市である。スハレバはこの都市を中央アジア最大の都市で、機械制生産がまだ存在せず封建的手工業が存在した都市と規定している。ここではイランとの関係が深く、広い意味での中東の一都市（イスラム都市）で、しかも手工業が大量に簇生した都市と考え、ブハラの諸産業と、イラン諸都市の生産諸産業とを簡単に比較してみた。

(注28) Сухарева, О. А., цит. по. Поздне, стр. 93. ハリフとは他人の仕事場で雇用されて働くマスターのことである。仕事場主人（ウストコール）から貸付金（ブナーク）を受けないハリフはオリヤート・ハリフと呼ばれ、貸付金を受けたブナーク・ハリフよりもずっと自由であった。ブナークとは就業時に必要な準備金を借り受けることで、ハリフは新しい仕事場主人からこれを借り受け、諸支払い、とくに前の主人へのブナーク支払いをした。ともかく、ブナークが存在した限り、その主人のもとを去ることはできなかった。

(注29) スハレバによれば当時、ブハラの織物業は

「家々に分散された生産（マニユファクチュア）から集中された生産組織」（Стр. 157）にいたっていたといわれるから、イランの場合はこれ以前の段階にあったと一応考えられる。また、イランにおける生産関係を知る一側面として、イランのギルド *ansaf* を若干考えてみる。ギルドの規制つまり、内部への「労働の規制」と外部への「独占化」（M. Weber）の点から考えると、ブハラの場合にはこの諸規制はきびしかった。これに対してイランの場合はゆるやかだったようである。なお、このような諸規制が西欧において強化されたのは「ツンフト革命」後であったし、しかもウェーバーがイスラムにおいても「ブハラにおけるごとくツンフト革命すら起こった」と記していることから、ブハラにおける諸規制の強さとイランにおける弱さはこれとかわるかもしれない。Weber, M., *Wirtschaftsgeschichte*, S. 129. (黒正敵他訳『一般社会経済要論』上岩波書店 1954年 271ページ) つまり、イランにおける生産関係は、ここでもブハラ以前だったと思われる。

(調査研究部)

アジア経済研究所刊行

片野彦二著

アジア諸国の社会資本

——医療・教育施設拡充必要度の推計——

研参214/B 5判/154頁/700円

発展途上国の経済開発は、各々の国の経済活動水準に対応して一定の水準の社会資本が維持されなければ、順調な発展は期待できないという基本的認識の上に立ち、アジアの主要国の社会資本の問題に計量的な接近を試みる。

神原周編

中国の技術と資源総合利用

研参215/B 5判/151頁/750円

日本や欧米先進諸国から最新の石油化学工業技術を導入するなど、新しい技術体系に基づく社会をつくり上げる実験過程にある中国に、技術と資源の総合利用という面から取り組む。

アジア経済出版会発売